花伝書

総序

夫、申楽延年の事態、其源を尋ぬるに、或は仏有所より起こり、或は神代より伝るといへども、時移り、代隔たりぬれば、其風を学ぶ力及びがたし。近頃、万人の弄ぶ所は、推古天皇の

〔口訳〕一体、猿楽を演じ遐齢延年の楽をするといふ事は、其の根源を尋ねて見ると、或は仏在所たる印度より起るといひ、又は我神代の昔より伝はるともいはれてゐるが、只今は、其の時代は遠い昔と隔たつて居る為に、その根源時代の風を学ばうと志しても不可能である。近頃諸人の賞翫する所の猿楽は、推古天皇の御時に、聖徳太子が秦の河勝に仰せつけられて、一面には天下安全を祈る為、又一面には諸人の快楽の為に、六十六番の遊宴をなさしめられ、それを申楽と名づけられたのがはじま

御宇に、聖徳太子秦河勝に仰て、且は天下安全の為、且は諸人快楽の為、六十六番の遊宴を成て、申楽と号せしより此方、代々の人、風月の景を仮て、この遊びの媒とせり。其後、かの河勝の遠孫、この芸を相続で、春日日吉の神職たり。仍、和州江州の輩、両社の神事に従ふ事、今に盛なり。されば、古を学び、新を賞する中にも、全風流を邪にする事なかれ。たゞ言葉賤

りで、それより以来、代々の人が、花鳥風月の美しい景物を借り入れて、この申楽の趣をそへ来つたものである。其の後、かの秦河勝の遠孫は、この芸を相続して、春日神社と日吉神社の神職となつてゐるのである。よつて、和州や江州の輩が、この両社の神事にしたがふ事は、今も尚盛んである。

かやうな次第であるから、此芸に於て、或は古風を学び、或は新風を賞する際に於ても、決して此の風流を邪道に走らしめてはならない。ただ言葉づかひに於て上品に、姿の優雅な者をば、

しからずして、姿幽玄ならんを、受けたる達人とは申べき哉。先、此道に至らんと思はん物は、非道を行ずべからず。但、歌道は風月延年の飾りなれば、尤も之を用うべし。凡、若年より

立派な達人といふべきであらう。先づ、此の道に入らうと思ふものは、他の芸道などをやつてはいけない。しかし、歌道だけは例外で、これは、猿楽のかざりとして重要なものであるから、せいぜいこれを学ぶがよろしい。自分が若年時代より今までの間に、見及び聞き及んだ所の稽古についての条々を、以下大概しるしとどめるのである。

以来、見聞き及ぶ所の稽古の条々、大概注置所なり。

一、好色、博奕、大酒、三重戒、是古人掟也。

一、稽古は強かれ、諍識は無かれと也。

一、好色・博奕・大酒、この三重の禁戒は、古人の戒められた掟であるから、大に誡めねばならぬ。

一、稽古といふ事はどこまでも強くすべく、他人に対して諍識をもつてはならない。

〔評〕

以上は花伝書の序ともいふべき文である。其の内容は、神儀篇に更に詳細に説かれて居るから、是非同篇を参照すべきであらう。「此道に至らんと思ふ者は、非道を行ずべからず」といふ語は、其の芸道に一意専心なるべきことを強調したものである。これは、中世芸道を一貫して、どの道に於ても唱へられた所で、最も服膺すべき言葉であらう。但し、歌道を学べといふ言葉は興味が多い。「風月の景を仮りて此の遊の媒とせり」といふ風月の美趣を愛好する心も、多く和歌によつて育てられて来たものである。その上謡曲詞章の製作には、歌道のたしなみが是非必要なものであつた。従つて、本質的に言つても実用的に言つても、歌道は猿楽謡曲の発達に、非常な貢献をしたものであることは疑ふべからざる所である。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著